

序文

2020年2月に日本に押し寄せたコロナ感染症拡大の波は、世界秩序に大きな変革を迫るものでした。また「新日常」が当たり前になり、その基軸に「社会的距離」をいかに取るかという課題が地球上のすべての人々にとって、ほぼ最優先事項になるような時代に変化しました。コロナ後の世界では、3つの密（密閉、密集、密接）を常に回避することが、感染拡大防止策として国内外で勧告されており、その実現が公衆衛生上必然であると考えられています。これはウィズコロナ時代の「公共善」であるとも言えるかもしれませんが。そうしたなか、宗教的、文化的権利としての宗教の自由をコロナ禍でどう認めていくのかが問題になっています。この問題は、一神教の中でも集団礼拝を営むことが宗教上の義務となっているユダヤ教とイスラームにおいて特に顕著に現れています。また、感染症の犠牲となって死亡した家族をどう埋葬するのか、という問題は、土葬を基本としているイスラーム教徒にとって深刻な問題となっています。疫学的かつ公衆衛生上の観点から火葬が前提となった場合、それはイスラーム教徒にとっては耐え難い状況になります。中東、東南アジアのイスラーム社会ではコロナ禍の状況下でもさすがに火葬は実施されることはありません。他方、ヨーロッパでは疫学的かつ公衆衛生上の理由から、感染犠牲者を火葬する措置を国家がとったことが、イスラーム教徒による反発を招きました。また、正統派ユダヤ教徒が感染拡大のさなかで集団礼拝を継続したり、彼らの運営する学校を閉鎖しなかったりしたことで、クラスター感染が発生し、それを知った人々が彼らを特別視したり排斥したりする事態がイスラエルやアメリカで発生しています。

コロナ感染症の拡大を防止することは、「生きる権利」という人権上もっとも中核的な人権の問題であることはいまでもありません。コロナ感染後重症化した場合には死に至ったり、重体となって後遺症が残ったりするなど、感染拡大は人間の生命を危険に晒すことになるからです。他方、社会的距離を保つ国家政策を守り続けることによって、職を奪われる社会的経済的弱者が増大してことも事実であり、「生き延びつつ食べて行けるのか」という生存権が脅かされる状況が世界各国でおこっています。

本プロジェクトは、こうしたコロナ感染の影響が複合的かつ多層的におこっているなか、特に宗教的自由と疫学的公共善との両立はどうあるべきかを考察するものです。本書は2つのパートから構成されています。最初に人権と人間の安全保障の観点からコロナ禍の宗教的自由を論じたものです。パートIIは、ユダヤ教及びイスラーム世界でのコロナ後の宗教的自由と国家権力の問題、日本のメディ

アにおける正統派ユダヤ教徒についての報道、コロナ禍がムスリム女性の日常生活や社会運動にもたらした影響についてなど、実証的な事例研究から構成されています。本報告書の所収されている論文は、2020年5月より稼働した本プロジェクトの成果です。他方、これらの論文は、本プロジェクトが実施した2つの **Webinar** での研究報告と討論に触発されて執筆されたことも強調しておきたいと思います。2つの **Webinar** については、本報告書の最後にカラー刷りで **Webinar** の模様を記録しています。また、同志社大学の HP にて、2つの **Webinar** の概要を発信する予定となっています。

本研究は同志社大学の All Doshisha Research Model「新型コロナウイルス感染症に関する緊急研究課題」の助成を受けたものであります。本助成に対し心から謝辞を表します。研究に参加したすべてのメンバーは、本研究がウィズコロナの時代において喫緊の研究課題の一つであることを自覚しつつ研究に携わりました。他方、本研究は、まだシードプロジェクトの段階であります。本研究の参加者一同は、本成果報告書を契機にさらに研究を拡大、深化していきたいと考えております。本報告書の内容に関し、みなさま方から忌憚ないご意見、ご感想をいただければと思います。

最後に、同志社大学研究企画課の職員のみなさまにはお力添えをいただき、ありがとうございました。また、特別研究員の阿部泰士氏には、本報告書の編集に多大なご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科
教授 中西久枝
京都、2021年3月